

「記事を読んで、いても立ってもいられなくなって電話しました。あの桜を救ってほしいんです」。今月17日付の群馬版「ほほえみ便」を読んだ前橋市の主婦山下久美子さん(39)から前橋支局に電話があった。記事は、群馬大工学部キャンパスのしだれ桜を同大OBが協力して世話するという話だった。山下さんは、生まれ育った六合村に根を張り千年とも言われる「小倉のしだれ桜」の衰えに気をもんでいた。早速工学部キャンパスの老木を診た樹木医を紹介、25日、その「診察」に立ち会った。

(塚原 早織)

ほほえみ便

群馬大工学部の桜を救ったのは、前橋市で造園業を営み、「樹木医」の資格も持つ塩原貴浩さん(33)。塩原さんは大学時代から桜に

「あの桜も救って」

読者導かれるように電話



塩原さん(右から2人目)の説明を熱心に聞く山下さん(右端)ら(25日、六合村で)

興味を持ち、これまでに100本以上の桜を診断・治療してきた。

「小倉のしだれ桜」は白根神社の境内に一本だけそびえる、高さ10メートル、根回り5メートルの大木。1986年に村の文化財に指定された。

25日は大雨で肝心の土中の根の点検はできなかったが、塩原さんは幹をたいたたり、枝ぶりを点検し、「草刈り機は地表近くの根を傷

める」「小さな傷口でも菌が入ってしまう」と、山下さんや集まった古老に今後

の育て方をアドバイスした。「たいぶひどいが、あきらめないで。やれることはたくさんある」との言葉に、山下さんらはホッと胸をなで下ろしていた。

神社近くに住み、父親の代から桜の世話をしてきたという山口政勝さん(77)は「昔は桜の下で祭りをやっ

た。子どもは木登りもしたもんだ」と懐かしそうに振り返っていた。

電話をくれた山下さんも実家が神社の目の前。「桜の下で母親に子守歌を歌ってもらったし、鬼ごっこもしました」と懐かしむ。「桜の前に立つとウツがつけな

いんです。全てを見透かされているみたいで。長い間、色んな人の人生を見てきたからでしょうね」と思い入

「ほほえみ便」は、心温まるニュースをお届けします。読者新聞前橋支局は皆様からの情報をお待ちしています。(連絡先は題字下をご覧ください)

れは深い。

枝が折れ曲がりたり、樹皮にカビのようなものが生えていることに気づいたのは大人になってから。木の前立立つと、桜が「手が痛い」「足が痛い」と言っている声が聞こえるような気がして、いたたまれなくなるという。そんな時、本紙を読み、「木のお医者さん」に診てもらうしかない」と確信。思い切って前橋支局に電話をかけたという。塩原さんは「もの言わぬ桜に導かれたような縁だ」と振り返った。山下さんも「何としても元気にさせてあげたかった。塩原さんに電話をかけた時は何かに背中を押されるような気がしました」と語った。